

おぼろげな平塚らいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

〔総会報告〕

アジアと世界の平和のために
らいてうのこころざしを受けつぎ行動を



平塚らいてうの会が代表理事制に移行してから1年。第24回通常総会が5月27日、東京ウイメンズプラザで開催されました。会員のみなさまのご協力で総会は成立し、予定の議事を終了したほか、らいてうのこころざしを受けつぎ平和のために行動するという声明を採択しました。

「家」は4月29日オープン

この1年間、常に理事会での合意を基本に平塚らいてうの会とらいてうの家の運営にあたってきた3人の代表理事が、それぞれあいさつ。らいてうの家は4月29日に予定通りオープンし、地元の特ロンボーン奏者・高木夏子さんの演奏と、今年

度の企画展示「らいてうと博史―今日の視点で考える『新しい女』と『新しい男』」はともに好評で、地元紙「信濃毎日」に報道されたことが紹介されました。（詳細は2面）

金輪きみ子事務局長が2022年度事業報告と決算報告（写真）。コロナの様子を見つつ、家の来館者数も少しずつ復活し、団体受け入れやいくつかの講座を実施でき、東京の講座も好評だったこと、茅ヶ崎とのつながりが広がり、研究・資料蒐集、整理活用を発展を展望できること、『紀要第14号』を発行でき、次号も発行予定であることなどを報告しました。

今後の課題として若い世代を含む会員増の必要性を強調し、家の紹介の場として地元の「八十二文化財団」の提携文化施設になること、『紀要』普及のため、会員価格を500円にすることを提案しました。

報告と提案は全会一致で承認され、新理事1名を含む役員が選出されました。

平和への行動を―声明を採択

今年の総会では、ロシアのウクライナ侵攻による歴史の転換点に立って、らいてうのこころざしを受けつぎ、日本を再び「戦争をする国」にしないために行動するという声明を採択し、公表する

ことを決めました。（声明全文は4面）
声明案をめぐる、「日本を戦争する国にしない」ための「行動」のイメージについてさまざまな意見が出されました。

「この声明をつながりのある団体、個人、メディアに送って内容を知らせることが行動の第一歩」「地域の仲間と街頭行動をしている」「車いす生活だが、家にチラシを貼って訪問者に語りかけている人もいる」「ウクライナ戦争が何故起こり、何故収束しないか等々を学習し話し合うことも行動の一つ」

……行動内容はそれぞれで、自分なら何ができるか考えようという結論となりました。

「らいてうは1971年に亡くなる前年、成城の自宅の近くで安保反対の小さなデモをしました。最後まで行動した人でした。一緒に行動できたことは今も私の支えになっています」という折井美耶子さんの発言で、討論は締めくくられました。

（代表理事 堀江ゆり）

今年度役員

代表理事・沓掛美知子、堀江ゆり、三留弥生

事務局次長・金輪きみ子

事務局次長・北澤有希子

理事・青木俊子、井上美穂子、植草充代、折井美

耶子、木村見江、久野泉、倉橋純子、小林明子、

竹花みい子、藤川延子（新）、宮下昌子、山田繁

子、若尾伸子

監事・佐久間由美子、由比ヶ濱直子

らいてうの会 特別講座

「結核療養所・南湖院と『青鞥』」

神奈川県茅ヶ崎市史編集委員

大島英夫さん

第24回通常総会後、らいてう会（1971年5月24日没）の特別講座として、大島英夫さんにお話しいただきました。

南湖院と高田畊安

南湖院（1899～1945）は最大時には5万坪の敷地、14病舎（入院患者は約二百人）の医療施設。『青鞥』の編集部がそこに移ったかのような時期もあり、らいてうと奥村博史が出会った場所でもあり、その後もらいてうとは縁が続きます。

院長の高田畊安は京都府出身のクリスチャンでした。困窮者向けには軽費療養施設を設け、入院費を払えない人には免除するなど、弱者救済の思想がありました。博史が南湖院に入院した際には、博史が描いた絵を買ってあげて、それを入院費に充てることもしていました。

結核は今よりもはるかに偏見がつよく、開院には地域住民の反対もありましたが、やがて市民権を得ていきます。畊安は広報が得意でした。新聞に広告を載せる、南湖院の写真をはがきにしておみやげにする、クリスマス会には五千通の招待状を送り、来た人には豪華な食事を提供する、徹底

した衛生管理で「大丈夫」とアピールする、など。

日本女子大学の校医だった畊安は、らいてうには旧知の医師であり、姉の孝には南湖院への入院経験があります。らいてうの小説「厄年」（『中央公論』1916年12月号）は、結核と診断された博史が入院するまでが題材ですが、いかに畊安（作中T医師）を信頼していたかがわかります。南湖院の入院患者のほとんどは裕福な境遇の人でした。国木田独歩をはじめ、多くの文士も入院していたため、周囲には見舞いに訪れる人が宿泊する旅館もありました。

自由な世界

南湖院は当時としては想像もつかないほど、自由な世界でした。完全個室で、性別で病舎を分けていませんでした。テニスコートや映画館、浜辺でくつろぐスペースなどもあり、カルタ遊びや聖



講演する大島英夫さん
＝5月27日、東京ウィメンズプラザ

書研究会を開くなど、自由に交流できます。外からの出入りもできました。南湖院は日本で初めて女

性医師を登用し、積極的に女性の職員を雇いました。女性が能力を生かせる環境でもあり、自由な世界でもあり、新しい女たちがとって、居心地が良かったのではないかと思います。

保持研^{やすもちよし}あつてこそ『青鞥』

生田長江から「女性だけの文芸誌を」と勧められたらいてうは、あまり乗り気ではなく、保持研が「ぜひやりたい、いっしょにやりましょう」と熱心に語ったからこそ、『青鞥』の発刊が実現。保持は経理から広告取りまでこなし、持ち前の面倒見の良さで信頼されていました。

保持は南湖院に入院し、快癒後は事務職として働いていました。そこでは俳句仲間と交流し、作品を発表しており、すでに文学に足を踏み入れていました。なるほど、文芸誌の発刊に前向きだったわけです。らいてうが体調を崩した尾竹紅吉に南湖院への入院を奨めたのも、保持がいる安心感があったのでしょう。

*

畊安が死去した後、土地と施設を海軍に接收され、南湖院は閉院を余儀なくされました。現在は第一病舎のみが残っており、「いずれは耐震補強をおこない、資料館として公開したい」、「ブックレット『南湖院』（茅ヶ崎市史編集委員会）も資料を補充して改訂版をつくりたい」と大島さん。興味深いお話を、ありがとうございました。

（久野泉）

らいてうの家

オープンイベント



今年のオープンイベントは、新しい企画展示の解説とトロンボーン演奏で開館としました。例年、地元音楽演奏者を招いていますが、本年は、若手の演奏家の高木夏子さんに出会うことが出来ました。ご本人からの熱い想いのメッセージを掲載します。

*

4月29日に行われた、らいてうの家「オープニングセレモニー」で演奏させていただきました。初めてらいてうの家を訪れました。平塚らいてうさんのことはあまりよく知りませんが、彼女のことを知れば知るほど魅力的で尊敬の念が湧いてきて、多くのことに共感できました。

私はというと、15歳の時にたまたまテレビで目にした、「ドイツ・オーバーハウゼン市にある「ドイツ国際平和村」がきっかけで、戦争や平和について興味を持つようになりました。ドイツ国際平和村は、世界各地の戦争や紛争、貧困等で傷ついた子供たちを無償で治療し、また国に帰すという活動を56年続けているNGO団体です。私もドイツ

留学中に訪問し、現在はサポーターとして、音楽で想いを伝える平和活動に取り組んでいます。

15歳の当時、私には夢や希望はありませんでした。「何のために勉強しているのか、何のために生きているのか。」そんな疑問ばかりが浮かんできては消え、この世に生きる使命が分からず葛藤していました。そんなある日、テレビに映し出された戦争や紛争で傷ついた子供たちを目にします。直視できないような痛々しい怪我の様子に思わず「かわいそう」とつぶやきました。そしてどこか他人事かのように、「誰かどうか助けてあげて」と思っていました。番組の後半では、平和村で治療、リハビリをして元気になった子供たちが楽しそうに遊び回っていました。その画面越しから元気に遊ぶ子供のエネルギーが伝わってきて、思わず笑顔になりました。その番組を観たその晩、いろんなことが頭を駆け巡りました。

「世界のどこかで私と同じ世代の人たちが戦争や飢餓で苦しんでいるのだ。自分は五体満足で生まれ、こんなに平和な国で生まれ育ったのに、なぜ何もできないとあきらめてしまっているのだろう。」そんな想いから、自分の大好きなことを仕事にしようと思え、「超一流のトロンボーン奏者になる！そして平和への想いを多くの人に伝えられるひとかどの人になろう」と大きな夢を持つことにつながりました。

20年経った今、私はプロのトロンボーン奏者として活動しています。夢を叶え、これからはより多くの人に平和への想いを伝えていくために「新しい音楽家」として活動の幅を広げていこうと立

ち上がりしました。「音楽絵本」というジャンルにも取り組み、脚本を自ら書き、制作中です。「平和」というテーマをより身近に感じてもらい、世界に目を向ける人が一人でも多くなることを願っています。そしてこれが私の生きる使命だと感じ、今日も立ち上がり続けています。

(上田市出身・在住) トロンボーン奏者

高木夏子

森のめぐみ講座

(6月11〜12日)

1日目は雨のため参加者の交流会をしました。

2日目は筑波大実験センターの方のお話し予定が変更になり、パンフレットを片手に倉橋理事の解説で樹木園を1時間かけて観察しました。

この樹木園の目的の一つは菅平の寒冷な気候で生育できる200種の樹木種を生きた状態で展示すること、もう一つは、菅平本来の自然であるブナ林を復元し展示することです。

全周するには1時間半から2時間かかるのとですが、葉の形や葉脈など改めて見ると、とてもおもしろく、珍しい草花もあり、すぐに時間が経ってしまいました。この季節だけでなく、他の季節にも観察がしたいと思いました。

(沓掛美知子)



〈声明〉

日本を「戦争する国」にしない――

らいてうのいっしょを分けず、

アジアと世界の平和のために行動

しましょう

2023年5月27日

昨年2月のロシアによるウクライナ侵攻から1年3カ月。多くの犠牲者を出し、くらしも環境も破壊する戦争を、軍事力の強化によってさらに拡大するのか、国連憲章に基づく平和的な国際秩序をとりもどすのか―私たちは歴史の転換点に立っています。

重大なことは、岸田政権が、ウクライナ侵攻やアジア情勢を契機として、国民の意見も聞かず国会にも諮らずに、「敵基地攻撃能力」の保有、軍事予算の倍増という日本の安全保障政策の大転換・軍事強化を進めていることです。憲法9条違反はもとより、国際法で禁じられた先制攻撃にまで突き進もうとする大軍拡は、国民生活を破壊するとともに、戦争につながるものとして、国内外から懸念の声が上がっています。日本を再び「戦争する国」にすることは、何としても許してはなりません。

平塚らいてうの会は、平和・協同・自然を愛し

女性の自立を願って行動した平塚らいてうのころざしを現代に生かそうと日々活動しています。

らいてうは、第2次世界大戦の反省に基づいて制定された日本国憲法9条に深く共鳴し、「非武装・非交戦」の立場から原水爆禁止、軍事基地反対などの運動をすすめて、「核兵器も戦争もない世界を」「ただ戦争だけが敵」「平和のために一致点で共同を」と訴え続けました。

当会はそのころざしを受けつぎ、昨年のロシアのウクライナ侵攻には強く抗議するとともに、国内外の反戦の輪に加わる意思を表明しました。

戦争か平和か―私たちは、歴史の転換点に立っています。「生きることは行動すること」と言い残したらいてうのころざしを生かすことが、今まさに問われています。

らいてうはまた、「わたくしは永遠に失望しないでしよう」と、若い世代による運動の前進への希望を語りました。私たちは、らいてうのころざしを受けつぎ、多くの人々と手をつなぎ、憲法9条を守り生かして日本を再び「戦争する国」にしないために行動することを決意するものです。

NPO法人平塚らいてうの会 第24回通常総会

『紀要』普及のために 会員にはバックナンバーを割引価格500円で販売します。
送料、振込手数料はご負担いただきます。FAX・メールでご注文ください。『紀要』各号の内容は会のホームページをご覧ください。

追悼 林一六先生

2023年4月28日、83歳の生涯を終えられた。元筑波大学名誉教授であり、菅平にある「筑波大菅平高原実験センター長」をされていた。自然科学が専門で、ゼーベック発電や水流発電などを提唱され、「らいてうの家」の眼前に太陽光発電装置設置問題がもち上がった2016年10月22日に真田林業会館で先生からメガソーラーの地球に与える影響について話していただいた。そこから設置反対運動の方向が定まり、会員一丸となって反対運動に取り組むことができたのです。らいてうの家の庭に生息する小動物や昆虫についてもつと先生からお聞きしたかった。合掌 (杉山洋子)

【事務局日誌】

- 4月15日～17日 りいてうの家オープン準備
- 4月20日 第5回代表理事会(オンライン併用)
- 4月29日 りいてうの家オープン
- 5月18日 2022年度会計監査
- 5月27日 第6回理事会(オンライン併用)
- 5月27日 第24回通常総会・第1回理事会
らいてう忌・特別講座「結核療養所・南湖院と『青鞥』」講師・大島英夫さん(於東京ウイメンズプラザ)
- 6月11日 森のめぐみ講座①らいてうの庭の手入れと植生観察
- 6月12日 筑波大実験センター内植物観察
- 6月22日 第2回理事会(オンライン併用)